

## 芥川だより

発行日\*\*\*2018年4月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 - 1 4 - 3

TEL 072 - 681 - 8870

梵

\*\*\*\*\* 一部100円です \*\*\*\*\*



## 資本主義が人の心を占領してしまった

何を今さらといぶかしく思われるかもしれないが、このままでは人は幸せにはなれない。資本主義という化け物を何とかしなければ、人がバラバラになり幸せは遠のいていく、なんとも不思議な畏にはまってしまったものだ。私は、これまで社会の多くの事に対して錯覚をしてきた。裕福そうに見える人たちは私が知らない幸福な人生を生きていて見識高く尊敬すべきものだと思っていたが、そうではなかった。彼らは特別に賢いわけでも幸せでもなかった。確かに私の知らないことを多く知っていたり大きな家に住んだりしているのだが、私が想像していた幸せな生活とは違った。

安倍政権が墮落した姿を隠そうと懸命になっているが、総理大臣になってもその程度なのだ。社長になっても同様に金に追い立てられ逃げ回って生きているようなものだ。資本主義の畏とは何かというと、金がすべてであってすべてのものを金もうけの為に利用し尽くす、人はもちろん、時間も自然もすべて利殖の為に、人はロボットのように教育され死ぬまで金もうけの為に利用される。

マルクスは資本主義から社会主義へと説いたが、この調子では資本主義からロボット社会になり人は自己再生産をする便利なロボットになる。人工知能を持ったロボットに使われるようになるのかもしれない。

どんなに金があろうと、地位があろうと学識があろうと、関係なく人は幸せにはなれない。宗教マジックであってもなれない。なぜかと言えば、資本主義という無慈悲な金儲けの化け物が人の心を占領してしまっているからである。

この化け物を退治する方法は、新たな社会システムを考え作り出すしかないのだが、まずは資本主義にどっぷり浸かり占領された人々が自分の心に反逆しドロップアウトするしかない。人は保守的だから天変地異でも起きるのを待つしかないかもしれないが、考え方をかえれば、何かのきっかけがあれば一晩で変わる可能性もある。今、考えられる次善の社会は高福祉国家である北欧型の社会民主主義社会かな？

死をめぐるあれやこれ(43)

石川 吾郎

NHKニュースは信じられるのか？

先日の森友問題で佐川氏の喚問の国会中継を見ている、つくづくと我々国民がバカにされていると感じた。安倍政権になって五年ばかり、我々の国の形がこれほどまでに大きく変えられ、国民の生活の基盤が損なわれ、大会社だけが儲ける国にしてしまったのはなぜだろう、という素朴な疑問が際限なく湧いてくる。安倍政権をいつまでも居座らせている一番の理由は何だろうか。マスコミ、特にNHKニュースが大きく影響しているのではない。国民の政府に対する不信や抗議のデモなど、大切なことを伝えず政府に奉仕する役割をしているのがNHKではないのか、といったことを考えていた矢先、国会でNHKについての内部報告が明らかにされた。三月二十九日の参院総務委員会では共産党・山下芳生議員が指摘している。NHKのニュース7、ニュースウオッチ9など主なニュースの編集責任者に、幹部からの指示が出ているのだと。それによると森友問題を放送するときには①トップニュースで伝える②トップで使ってもやむを得ないが三分半以内限定③昭恵さんの映像を使う④前川前文科次官講演問題と連続して伝えるなど、非常にリアルで詳細な内容で、NHKが自ら権力の圧力にすり寄っていく姿勢が鮮明なものだという。国民にとって大切なことを隠し、大相撲のスクヤンダル(裏面につづく)

のようなものを延々と流すニュースの時間。本来国民が正しく怒るべき問題を国民から隠蔽しまう、という姿勢といえる。受信料を徴収して公共放送を名乗るNHKのニュースがこのありさまだ。国民はこんなニュースから、大切なことを正しく判断することはできないだろう。

私たちは、民放のニュースや新聞やネットも見比べて、ニュースの裏に何があるのか、注意していく必要があるのではないか。

さて今夜のNHKニュースは、何を隠そうとするだろうか？

尚、今述べた山下議員の質疑は国会のホームページで見ることができる。参議院ホームページのインターネット審議中継から、日付カレンダーを選び、総務委員会、山下芳生（共産党）をクリックすると見ることができる。ぜひ一度この審議を見ていただきたい。尚衆院・参院ホームページからは、過去の国会中継も見ることができる。これはぜひ利用したいものだ。NHKニュースは必ず安倍の弁解答弁を最後にもってきて印象操作をして伝える。国会の議論を、ぜひ生の議論そのものを確かめてみてもらいたい。



芥川だより一三五号 目次

ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳	坂本一光	2
哲学屋のつぶやき	祖蔵哲	3
大峰奥駈道	梵店主	5
大人の今昔物語	石川吾郎	6
我がおくのほそ道の旅	成瀬和之	8
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	8
オクラの山たより	困了生	9
邪馬台国と火の国	満田正賢	14
AIBOがピザを作る日	大江雉兎	17
孫ウオッチング	福田圭	19
編集後記	嘉	19
女90年の軌跡	眞糶	20
俳句	土田裕 影山武司	20

素老人☆よもだ帳(49)

坂本一光

◆「君たちはどう生きるか」と

真つ直ぐに日本国憲法前文に問う  
日本国憲法前文を声に出して読むと、この国は戦後、「戦争を語れば平和が語られる」国として出発したことにあらためて気づく。さすがの第二次安倍政権もや

つと終末期を迎えたかと信じたい昨今であるが、しかしもしもこの政権に国民が万一再生を許すようなことがあれば、「戦争を語り平和を語る国」はガラガラと音を立てて崩れ墜ちるだろう。時代はいつでも混沌としているが、表題に言う『君たちはどう生きるか』(吉野源三郎著、一九三七年刊)が、現在、漫画本と新装版(二〇一七年八月刊、マガジンハウス)をあわせて三百万部を超えて読まれている現象は、先の『蟹工船』(小林多喜二著、一九二九年刊)現象と同様に、この国の政治がもたらした闇の深さを如実に示している。三百万の背景にはその十倍を超える国民がいるだろう。実際、この本は新装版が出る以前から、たとえば手元にある岩波文庫では一九八二年から二〇〇六年までに五十五回も版を重ねて読まれて続けている。

しかし、反動は打ち倒さなければ自分から倒れることはない—そんな文言を学生時代にアジビラ(アジテーション・ビラ)で読んだ記憶があるが、安倍政権は自ら倒れることはないだろう。この政権の末路を私たちはどのように迎えるだろうか。

どんな思いであったか、六〇年安保闘争の前年にこんな詩が発表されていたことを知った『詞華集 生きていてほしいんですー戦争と平和』(童話屋、二〇〇九年刊より)。国の闇をつくりだす者たちの策動は一貫している。

雪崩のとき 石垣りん

人は  
その時が来たのだ、という  
雪崩のおこるのは  
雪崩の季節がきたため と。

武装を捨てた頃の  
あの永世の誓いや心の平静  
世界の国々の権力や争いをそとにした  
つつましい民族の冬ごもりは  
色々な不自由があっても  
また良いものであった

平和  
永遠の平和  
平和一色の銀世界  
そうだ 平和という言葉が  
この狭くなった日本の国土に  
粉雪のように舞い  
どっさり降り積もっていた。

私は破れた靴下を繕い  
編物などしながら時々手を休め  
外を眺めたものだ  
そして ほっ、とする  
ここにはもう爆弾の炸裂も  
火の色もない  
世界に覇を競う国に住むより  
このほうが私の生きかたに合っていると  
考えたりした。  
それも過ぎてみれば束の間で

まだととのえた焚木もきれぬまに人はざわめき出し  
その時が来た、という  
季節にはさからえないのだ、と。

雪はとうに降りやんでしまった、

降り積もった雪の下には

もうちいさく 野心や、いつわりや  
欲望の芽がかくされていて

「すべてがそうなってきたのだから  
仕方がない」というひとつの言葉が  
遠い嶺のあたりでころげ出すと

もう他の雪をさそって

しかたがない、しかたがない

しかたがない

と、落ちてくる

ああ あの雪崩、

あの言葉の

だんだん勢いづき

次第に拡がってくるのが

それが近づいてくるのが

私にはきこえる

私にはきこえる。

何ができるわけでもない素老人も、今  
を生きる一人の人間として「心せよ未来  
の人から見られている」という思いを忘  
れず、国の行く末を見届けたいと思う。

(かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人)

意識を哲学する (四)

〜森友学園問題のパラドクス

前月では、「意識」を記憶の問題として、  
文学を通していかに「意識」が「過去」  
(「記憶」)を欺くのかを話した。私たち  
が日常よく経験することであるが「確か  
に記憶にある」ほど「不確か」なこと  
はない。私見であるが、私はそれは「自己」  
が「自己同一」を保つための「要請」で  
あると思っている。つまり、刻々と変化  
する外の世界とさらに自分の「意識」に  
反して動き始める「自己意識」に対す  
る「自己」の「妥協」である。「妥協」とい  
うと打算的とみなされ非合理的とも思わ  
れるが、良いほうに解釈すれば「調和」  
になる。非合理故に「我信ず」という言  
葉を思い出したが、まさしくそれだろう。  
そして、それが自分にとつての「事実」  
であり「真実」である。そうすると一方、  
いわゆる客観的な「事実」や「真実」は  
これとは異なるということになる。ほと  
んどの人は真実は一つと知っているだろ  
うがそうではないことが普通に世の中  
は起こっている。それでも一つと思いた  
いのは、こういう理由からである。

さて、その二つの「事実(真実)」が現  
実の世界で問題になることが最近はやた  
らと多くなっている。以前にこの記事で  
も取り上げたが、アメリカ大統領就任式  
でトランプが「オバマの時よりも多くの  
国民が集まった」と豪語した。すかさず

マスコミはデータを示し「事実」と異な  
ると言った。そのとき補佐官が「オルタ  
ナティブ・ファクト」、つまり「もう一つ  
の事実」では「真実」であると答弁した。  
これはトランプの「事実」を指すのだろ  
う。これに限らず「ファクト」と「フェ  
イク」の泥仕合はアメリカに限らず世界  
を舞台に毎日どこかで興行されている。  
日本ではもう一年以上つづいているが  
「森友学園問題」が代表であろう。ここ  
でもやはり問題になっているのは「真実」  
は何か、誰が「嘘」をいつているのかで  
ある。

(1)嘘つきクレタ人のパラドクス

「嘘つき」といえば有名なのが「クレタ  
人のパラドクス」である。この話の典  
は、新約聖書中の伝道者パウロによる「テ  
トスへの手紙」(二章一一・一五節)であ  
り、ギリシヤの伝説的哲学者エピメニデ  
ス(クレタ人)が語った言葉とされてい  
る。そこにはこう書いてある「彼ら(II  
クレタ人)のうちの一人、預言者自身が  
次のように言いました。『クレタ人はいつ  
もうそつき、悪い獣、怠惰な大食漢だ』こ  
の言葉は当たっています。だから、彼ら  
を厳しく戒めて、信仰を健全に保たせ、  
ユダヤ人の作り話や、真理に背を向けて  
いる者の掟に心を奪われないようにさせ  
なさい。」

クレタ人であるエピメニデスが「クレ  
タ人はいつも嘘をつく」と言った場合、  
クレタ人が本当にいつも嘘をつくなら、  
彼のこの言葉も嘘となってしまう、とい  
うのがエピメニデスのパラドクスであ

る。パウロは間接的にギリシヤ哲学の「矛  
盾」を指摘し「キリスト教」の優位を説  
こうとしたのであろう。しかし歴史の  
結果ではこの時はギリシヤ哲学の勝ちで  
パウロはギリシヤを離れる。キリスト教  
が歴史的にその地位を確立したのが、そ  
れから一世紀程後、ローマ帝国皇帝テ  
オドシウスが三八一年に開催したコン  
スタンティノーブル公会議であった。

さて、「嘘」の話の前に、この「パラ  
ドクス」とは何かを最初に説明しなければ  
ならない。パラドクスは、ギリシヤ語  
の「定説に逆らうもの」が語源であり、  
日本語に訳すと「逆説」となる。一見真  
理に反するようだけど、よく考えると一  
種の真理を表していることや、逆に一見  
正しくないようでも、実際には真理をつ  
いている様子を意味する。例えば、「急が  
ば回れ」という言葉。真つ直ぐ最短距離  
で行った方が早く着くと考えがちだけど、  
実際は障害などが多々あるので、回って  
行くのが早いよ、というもの。一般に正  
しいと思われている説と全く反対の説で  
正しさを証明することを逆説と言う。「負  
けるが勝ち」というのは、正しさを完全  
に証明できないものも逆説とされる。「負  
けた方が損害は少ないので、あえて負け  
る。俺の勝利だ!」と。

「嘘つきのクレタ人」の話にもどる。こ  
れが「パラドクス」といわれると「いつ  
も嘘をつくクレタ人は「いつも嘘をつか  
ない」という「逆説」と解釈される。し  
かし、これはその種の「逆説」ではない。  
自分が自分のことについて言う「自己言

及」のパラドクスである。例えば『この文は偽である。』という文(A)があるとすると、(A)が真だとすると、そこで表明されていることは全て真でなければならぬ。しかし、(A)はそれ自身が間違っている(偽である)と表明しているの、それは偽のはずである。これを真とする仮説を立てると、それが偽だという矛盾が生じる。同様に偽とする仮説を立てても矛盾を生じる。この文を偽だとすると、そこで言っている内容は真ではないということになる。すると、それは真だということになる。どちらの仮説を採用しても、(A)は真でありかつ偽であるという結論に至る。しかし、この文を真とする偽だということになり、偽とすると真だということになることから、「真でも偽でもない」と結論することになる。この問題は無限ループに陥り、一見して「嘘でも本当でもない」ということが同時に起こってしまうように思われてしまう。

ここで若干の飛躍があるがこの問題を哲学的に考えてみよう。思考にとっては時としては「飛躍」が必要である。さて、籠池氏はこの問題にとっては安倍首相と同じ枠組みの人物と解釈してよいかと思う。「日本会議」とかという怪しげな組織の会員でもあったし、氏の教育方針に感激もしている。まあ、そうでなかったとしても「仮説」してそれを用いよう。もしそれが事実でなかったらその結果に「矛盾」がでてくるから、「矛盾」がなく、現実がそのとおりだとすれば、その「仮説」が正しいと証明されることになるから。さて、同じ枠組みとすれば「安倍首相」が「籠池氏」が「嘘を言っている」というのは「自分が自分を嘘を言っている」というように解釈も成り立つ。いささか強引であるが。これは「クレタ人のパラドクス」になる。つまり、私たちが籠池氏は何となく胡散臭いが安倍首相が「彼は嘘つきだ」として国会で答弁しても何となく「嘘でもあり本当」でもありと思ってしまう。結果的には国民のだけれもがこう思っている。ということはこのパラドクスを作っているのは安倍首相と籠池氏は同一人格である、つまりどちらも「嘘と本当」を同時にいう「信用できない同類」であるということになる。という理屈では、さらにこの先、一方の疑惑関係者である佐川氏が「安倍首相からの指示でやりました。」と発言しても、安倍首相は「彼は嘘をついている」と言えれば万事解決することになる。

さて煙に捲くような哲学的屁理屈の世界にまたなってしまったなど読者の方は感じておられるだろう。しかし、そうではない。今、政治で行われているのはこの「自己言及の世界」内の議論になっているということである。「国民の世界」ではなく「政治内の世界」「自分自身だけの論理」で動いている「自己閉鎖世界」である。この動向は日本だけではない。アメリカでの「自国中心主義」、それは他の覇権国も同じ論理構造である。

「(3)なぜ首相が平然と嘘をつけるのか」  
近代の理性社会のパラドクス  
哲学者が現実世界を語るとますます迷路に落ち込むことになる。これは何度も言っているが哲学が「現実」の常識そのものを疑ってかかるからである。では哲学の立場はどこなのか「現実」ではなくただの「空想」ではないかと問われる。しかし、その場合哲学は「現実とは何か」を問うわけである。特定の立場はない。「問うこと」そのものが「哲学」であるとはソクラテスの時代から不変である。さて、それでは敢えて、さらに現実の政治問題を哲学が解釈してみよう。同じく「森友問題」からである。

まず、先の政治問題でも皆の関心の大前提は「嘘をつくことが許されない」である。これは「世間の常識」である。しかし、「現実」には誰でも「すべきでない」とわかっていても「自然と」嘘をついている。「嫌な相手に同行を頼まれても、適当な嘘の理屈を並べて断る」「こんなことは日常茶飯事である。「現実」こそ「矛盾世界」「迷路の世界」である。「真実」よりも「自己都合」を優先するのは普通のことになって

(2) 森友学園問題のパラドクス  
嘘つき首相のパラドクス  
この政治問題の詳細は延々と国会で議論されてきているので読者諸氏はよくご存じであろう。しかし、決め手はやはり籠池氏が真実を話すのではなく嘘をついているのかどうかであろう。そしてそのキーパーソンがやはり安倍首相である。

いる。こういった事がわかっている人々でさえ、いや、これは俗世間のことであって政治の世界や公式の場ではあつてはならないという。しかし、それは現代社会では間違いである。嘘は公式の場でもゆるされるのである。事実を知ついても知らない嘘をいえる。それが「人権」である。近代以前の世界は「真実」を白状しなければ「人権無視」の拷問や嫌がらせが横行し、逆に真実が捻じ曲げるといふ事態が数多く作り上げられた。こういった恐怖の支配権力から「個人」をまもる、「個人」ということを「意識」した近代社会は「法」というのを考えだして「法の下」での「人権思想」を獲得したのだ。よって客観的事実よりも「個人の事実」の方が優先されることになった。しかし、あくまで他者の権利を侵害しない範囲ではあるが。そうすると「客観的真実」よりは「法律」といった「理性」的なものが優先されるといふことになる。嘘をついても理性的な「法律」のもとではとがめられないということになる。このようならずる賢い人は、特に政治家には沢山いる。

しかし、まともな人はここで心の痛みを感じるのはずである。そう、「良心」の咎めだ。これは「自然」と「情感」に湧いてくる。理性的な「不自然さ」に対して情緒的な「自然さ」が対立するのである。これが「葛藤」である。まともな人なら、そしてどうするかといえば、この「個人の事実」に嘘をつくのは客観的「事実」より大事なものであるからだ。「対象のすり替え」を行う。例えば「幸福」になるためとか「皆の利益」のためとかといったすり替えである。そし

て政治家はいつもこう考えている「これも国民のためだ」と。

哲学的には「真理」は二つある。「客観的真理」と「個人的真理」である。この二つはめつたに一致しないのは今まで説明してきた。そして「個人的真理」が近代では理性的な「法律」によって優先権を与えられた結果、益々二つの「真理」の間は広がった。そうした結果「自然的な感情」が対立することになりその間をうずめるべく「幸福」や「利益」といったものが「真実」よりも優先するようになった。これが現代という「功利主義」社会の実態である。「今がよければ」とりあえず食えれば「楽しければ」の方が「真実」よりも優先される世界である。皮肉なことにこのような社会を構成しているのが「理性」という「意識」でもある。現代では「嘘も方便」が正当化されるという哲学的結論を導いてしまったが、もちろんこれは条件がある。それは「嘘をつく人」がもつ権力の大きさの違いである。せいぜい二、三人しか力が及ばない人と一億人の人をその嘘によって強制できる人と同じ理屈で正当化できるわけではない。そのために「権力」に制限をかけるものが憲法であるが、それが今、軽視されている。「嘘のパラドクス」が権力に使われると暴走する。

#### (4) 意識の自己言及

冒頭の「クレタ人のパラドクス」に戻る。このパラドクスは少しおかしいところもあると気がついた人もいるだろう。政治家はクレタ人のように「常に」嘘を

つくだではなく、「時々」嘘をつくのだからパラドクスにならない考える人もいる。しかし、これとてどの「時々」なのかが解らないからパラドクスにはかわりない。やはり財務省の人達、安部内閣は「嘘つきのパラドクス」にある。さて、このパラドクスは「自己言及」であると先に話した。話をする時に、最初に自分のことを引用すると、後は全てパラドクスになる、つまりその話が嘘にも本当にもなると言われている。

この自己言及は「意識」の特徴でもある。私達は日常でも「心の奥深く」自分と話している。これが「自己意識」である。デカルトは「我考える故に我あり」と言ったが、ここに「存在している」と考えている私」ということを「考える私」がいるから「存在が確実」であるという「根拠」になる。いわゆる「メタ構造」である。現代の哲学者はにこれを「デカルト劇場」という思考実験で批判的にみている。内容はこうだ。人間の脳の中には小人（ホムンクルス）が住んでいる劇場があり、そのスクリーン上に人間の身体が経験した感覚的データが上映される。それが人間の精神現象であるとする。では、その小人の脳の中はどうなっているのか、さらに小さな小人がいるのか——デカルトのいうような、精神は身体に還元できない実体であるとする実体二元論は、意識の説明について無限後退に陥るという批判である。確かにこうかもしれないが、そうでないという証明もされていない。実態は逆でこの「自己言及」が

「無限ループ」に陥るのが「必然」であるという証明のほうが多い。ゲーデルの「不完全性定理」などはこの類であろう。閉ざされた世界では自己の論理が正しいかどうかは証明不可能ということだ。実際ゲーデルは「 $1+2=3$ 」ということの「正しさ」は証明不可能ということを「証明」した。この世界の数学を含むすべての思考体系ではそれ自身が前提とする真実が真実であるということが確実ではないということだ。二、三年前に公開された映画「インセプション」は夢のまた夢の世界を舞台にしていたが、それが「現実」であるかがわからなくなる。以前「哲学ゾンビ」の話で、果たして自分の周りにいる人がゾンビであるかないかはどのようにして確認できるのかという謎を読者に紹介した。それと同じように今、この芥川新聞を読んでいるあなたは本当に存在しているのかと証明できるでしょうか。夢であるとも言えるのではないか。

さて、今月はテーマである「意識」の問題を「世俗的現実」のなかで考えた。その結果、多くの説明できない矛盾がでてきたのであるが、これはどちらの世界の方に問題があるかわからない。しかし、確実なのは、夢であるかもしれないが自分の意識はあることが「感じる」である。「意識の自己言及」は現在でも謎である。脳科学が脳の機能を部位的に明らかにしてもその正体は依然として謎のままである。「意識の冒険」はまだまだ続く。

大峰奥駈道(17)

梵店主

行者還小屋

大普賢岳、国見岳、七曜岳の険しい道に歩き疲れた私は、もう先へは歩けそうにないと思った。とてもじゃないが、今の体力では本宮まで歩けない。

伝説の役行者もあまりの険しさから引き返したという行者還岳をなんとか登り急なガレ場を下っていくと水場の矢印が道横の岩に赤く書いてあった。矢印にしたがいガレ場を登ると湧水が流れていた。ほんの小さな水たまりだったが、汗をかき喉が渇ききっていたのでペットボトルに水を汲み一気に飲み干した。もう少しで小屋があるはずだと疲れ果てた自分に言い聞かせる。

すぐに高ちゃんが下りてきた。私は、「もうあかんわ、疲れた。俺は山を下りるから、お前ひとりで行ってくれ」と言った。

高ちゃん

「えっ、どうしたんですか？」と驚いたように言う。

「とてもじゃないけど、今の俺では本宮までは歩けない。行者還小屋から下りて帰るわ」

「とりあえず、小屋まで行きましょう」と言いながら高ちゃんは先に歩き出した。私は、申し訳ないなあ、と思った。自分から言い出した今回の大峰奥駈道である。

計画も自分の体力を過信して、六日間に  
した。あれやこれやと考えると、高ちや  
んには誠に申し訳ない。

ふらふらと疲れた身体で一五分ばかり  
歩いて行者還小屋の前まで来た。小屋は  
立派な二階建てのログハウスであった。  
なんと立派な小屋だなあといいながら、  
小屋の前に座って高ちやんと今後の予定  
を話し合った。

その結果、今日はこの小屋に泊まり、  
翌日は弥山まで登り天川村へ下りること  
になった。そうと決まれば、私も身勝手  
なもので急に安心して小屋に入った。  
水道もトイレもある小屋は、一五人ほど  
泊まれる大きくてきれいな小屋である。  
何故こんな立派な小屋があるのか不思議  
に思った。

まだ昼の二時前と早いために誰もいな  
いから、一階の入り口に近い部屋に荷物  
を置き、寝袋を出して潜り込む。ひと眠  
りして目が覚めると、今朝出発した小笹  
の宿で見かけた老人が入ってきた。私は、  
朝にその老人を見たときの印象が強く残  
っていた。他の登山者とは違い軽装のよ  
うに見えた老人のザックとゆっくり歩く  
姿であった。大丈夫だろうか心配にな  
ったからである。

老人と挨拶を交わし、手持ちの酒をす  
すめた。老人も愛想よく「少し見回りを  
してきてから頂きます」言っって荷物を置  
き出て行った。  
しばらくすると老人は戻ってきた。

私が

「この小屋の管理をされているんですか」と聞くと

「ええ、まあそんなもんです。ボランテアですけどね」

「えつ、ボランテアですか、大変ですね」

「ワインも焼酎もあります。よければ好きなだけ飲んでください」と言うると遠慮がちに

「ワインを少し頂きましょうか」

すぐにカップにワインを入れて渡した。私たちは、本宮まで行く予定であったが、計画変更して明日は弥山まで行き天川村へ下りる予定であること。そのために食料や酒が余ったので遠慮なく飲んでください、と言った。

老人は、つましく余計なことはいやべらずに静かに少し飲んだ。私が、好奇心から次から次へと問いかけると丁寧に答えてくれた。  
年齢は八〇才余り、生まれは東北の一戸、若い時には教員をしていたが、山好きであったために教員をやめて山に関係がある地図製作の会社に就職して国土地理院の地形図を作り続けてきたと言われた。

私は直観的に、この老人は凄い人に違いないと思った。大峯の山の神が私に与えてくれた摩訶不思議な人との出会いだと思えてきたから、次から次へと質問攻めをする。

## 大人の今昔物語(44)

石川 吾郎

今回は、天竺(インド)篇の仏教説話、  
仏教の經典の話しを再話したものです。  
今昔物語と言えば、本朝世俗部が有名ですが、こういった仏教説話のなかにも面白いものが多くあります。教科書に出ない度は二／五。

阿闍世王、父の王を殺す話し(巻第三 第二七話)

今は昔、天竺の国に阿闍世王というという者がいた。これは提婆達多と親友で、互いに語り合う言葉を、真実の言葉として信じていた。

提婆達多はその様子を見て、阿闍世王に言う。「君は父の大王を殺して新しい王となれ。自分は仏を殺して新たな仏になる」と。

阿闍世王は提婆達多の教えを信じて、父の頻婆沙羅王を捕らえ、人里離れた地に、七重の壁の頑丈な部屋を作り、その中に大王を幽閉し、厳重に門番を配して「決して人を通してはならぬ」と命令を下した。またこのような命令を度々發布して、各大臣や貴族に通達し一人として通すことはなかった。さらに「必ず七日のうちに責め殺そう」と企んでいた。

母の後・韋提希夫人は、これを聞き泣き悲しみ、自分が誤って悪人の息子を産んで、大王を殺すことになるのを嘆き悲

しんで、密かに蘇蜜(乳と蜜を合わせたもの)を作り、麦こがしと混ぜたものを持ち、幽閉された大王の元に密かに行き、これを大王の身体に塗った。また飾り物を作り、その中に重湯を入れて、また密かに大王に持っていった。

大王は、麦粉を食べ、手を洗い口すすいで手を合わせ、遙かに靈鷲山の方向に向かつて涙を流して礼拝し、「願わくば釈迦牟尼如来、我が苦しみをお助けください。仏法には巡り会いながらも、私は了見違いの息子に殺されようとしております。目連尊者(仏十大弟子の一人)はおわしますか。どうぞ我がために慈悲をおかけいただき八斉戒をお授けください。後世菩提の助けといたしとうございます」  
仏はこれをお聞きになり、慈悲を垂れ、目連と富楼那の二人の尊者をお使わしになった。この二人の羅漢はハヤブサのごとく空を飛び、速やかに大王の所に至り、戒を授けて法を説いた。その後毎日のように現れた。

阿闍世王は、「父の王はまだ生きて居るのか」と門番に問うと、門番が答えるに「未だ生きておられます。お顔の色も麗しく鮮やかで、亡くなられる気配は全くございません。これはつまり、お后・韋提希夫人が、ご内密に麦こがしに蘇蜜を混ぜたものをお体に塗り、璣珞の中に重湯を入れ差し入れておられます。また目連と富楼那の二人の大羅漢が空から飛び来たって、戒を授け、法を説くがゆえであります。制止する

ことはできません。」

これを聞いて阿闍世王は、ますます怒り、「わが母・韋提希は、悪人の一味である。悪羅漢の目連と富楼那を仲間に入力入れて、わが父・悪王を今日まで生かしているのだ」と言うと、剣を抜いて、母の夫人を捕らえ、その首をかき切ろうとする。

その時、菴羅衛女の子に、耆婆大臣という人物がいた。この人が、阿闍世王の前に進み出て、言うには「わが君、何と竟してこのような親を殺すという逆罪を犯されようとされるのか。毘陀論経には、この世のはじめから、世に悪王ありて、王位をむさぼるために父を殺すこと一万人の例しがある。ただし、非道にも母親を殺す者はいまだ聞いたことがない。大王よ、よくよく分別して、この悪行を思い留まりなさい。」

王はこの言葉を聞いて大いに恐れて剣を捨て、母を殺すことは止めた。

父王は、やがて死んだ。

その後、仏陀はクシュナガラ城の拔堤河(ぼだいが)のほとり、沙羅の林の中に居られて、大涅槃経にある教えを説かれた。そのときに耆婆大臣(ぎばだいじん)、阿闍世王に教えて言うには「王は(親殺しの)逆罪を犯されました。必ず地獄に墮ちられるでしょう。このごろ、み仏がクシュナガラ城の拔堤河のほとり、沙羅の林の中で一切衆生悉有仏性の教法(だれもが仏性をもつとする教え)を説かれ、一切衆生を助けておられます。速やかに

その所に行かれ、この罪を懺悔されたまえ」と。

これに対して阿闍世王「我はずでに父王を殺した。仏は自分を良しとはお考えにならないだろう。まして自分に目を掛けていただくこともないだろう」と。

耆婆大臣「仏は善をなす者を助け給う。悪をなす者をも助けたまうものです。一切衆生のために、平等無差別にわが子同然に慈悲を掛けていただけるものです。ぜひ参上なさいませ。」

阿闍世王、「我は逆罪を犯した。無間地獄(阿鼻地獄)に墮ちることになる。仏にお会いするとしても、この罪が消えることはないだろう。また自分はすでに年老いた。今更に恥じをかくのは、心苦しい」

大臣曰く「君、このたび、み仏にお会いになり、父を殺した罪をあがなうことがなければ、どの世界にこの罪が許されるかがあるでしょうか。無間地獄に墮ち入りたまうなら、二度とそこから出られる時はありません。必ず行かれなさいませ。」と、熱心に進める。

そのとき、仏から出たの光が、沙羅の林から阿闍世王の身体を照らすと、阿闍世王「世界の終わりのときにこそ、月日が三つ出て、世界を照らすという。これは世界の終わりなのか、月の光が我が身を照らすとは」

大臣曰く「大王、聞きたまえ。例えば人に多くの子があるとき。その中に

病気の者がいたり、障害をもつ者がいたとしても、その父母は愛情をもって育てます。大王は既に父を殺すという大罪を犯され、その罪は重大でございます。これは人の子どもの病気が重いものに相当するのではないのでしょうか。み仏は、一人の子どもに慈悲をおかけになります。大王のためをもって、この光を照らされたのでないでしょうか。」

阿闍世王、「それでは試しに仏のもとに出掛けてみよう。お前も我の供をせよ。我は五逆罪を犯した身だ。道中に大地が裂けて、地獄に墮ちるかも知れぬ。もしそのような時には、ワシを支えよ」と言い、阿闍世王、大臣を供にして仏の元に赴いた。

出発にあたっては、車五万二千両に、ことごとく旗と天蓋を取り付け、大象五百頭に、すべて七種の宝物を背負わせた。供として従う大臣以下の家臣はまさに無数であった。

沙羅の林に到着し、仏の前に進み出る。仏、王をご覧になられ「そなたは大王阿闍世か」と問われる。たちどころに初段階の悟りを授け、未来永劫の成仏の予言を与えられた。仏の仰せられるには「もし我、汝を道に入れることがなければ、我、仏として存在しないだろう。今汝は、我が元に来てきた。既に仏道に入ったということである。」と。

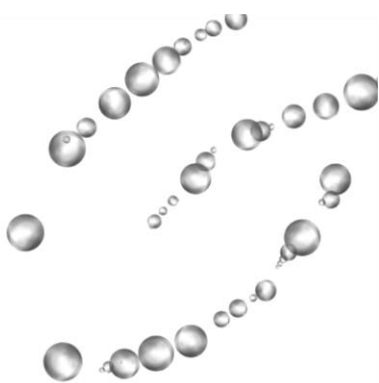
これをもって思うに、父殺しを犯した

阿闍世王は、仏の元に参上して三界(さんがい)のり惑いを断ち切り、初段階の悟りを得た。こんな具合なので、み仏の元に参上することの功德は量りがたいほどであるものだ、語り伝えていることだと。

### 《コメント》

今回は、有名な仏教説話からの話しを、訳してみました。今昔物語集の第三巻は天竺(今のインド)篇の話し、主に仏教説話を集めています。固有名詞のわかりにくいところが多々ありますが、ご容赦願います。

父殺しの阿闍世王は「阿闍世コンプレックス」という用語で、今日でも心理学の世界に蘇っています。なお、耆婆大臣の語る内容は「善人なおもて往生をとぐ、況や悪人をや」という親鸞聖人の言葉の思い起こさせます。



## 我がおくのほそ道の旅(15)

成瀬 和之

松尾芭蕉は、推敲に推敲を重ねて『おくのほそ道』を完成させた後の一六九四年五月十一日、またしても、江戸を離れた。「人生五十年」の時代、もう五十一歳になり身体もかなり衰えていました。「北の国々はまわった。今度は西の国をまわってみたい。」

西の国には、珍しい中国の船が、遠い海をわたって来る長崎という港があり、そこにも行ってみたい、そして、聞きたくない、異国の言葉も聞きたい、と思ったのです。

九月初め頃、芭蕉は大阪に着きました。芭蕉は健康がすぐれませんでした、それをおして、ほうぼうの句会に出かけて、弟子たちを導きました。

九月二十九日には、芝柏しはくの家に招かれましたが、どうしても気分が悪くて行けないので、次の句を、使いに届けさせました。

秋深き隣は何をする人ぞ

秋が深くなり、私は旅先で病む身だ。

じつと聞いていると隣もひっそりしている。こうして、おたがい知らない人間同士が、めいめい自分の生き方をしていっているのだが、いったいどんなことをして、隣の人は暮らしているのだろう、という意

味です。

芭蕉の病気は重かったのです。十月五日、南御堂前の花屋仁右衛門方に多くの弟子たちが集まって、一心に看病しました。八日の夜ことでした。芭蕉はかすれた声で、弟子の一人を呼んで、次の句を書きとらせました。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

芭蕉の人生は、詩の世界を求めてさすらいたどった旅のような一生でした。「詠んだ句はすべて辞世だ」と言っただけ、この句はそうした芭蕉の最後を飾るにふさわしいものです。あこがれの西の国にはついに行けず、芭蕉は十月十二日に亡くなりました。「南御堂」前の御堂筋の側道横の植え込みに「此附近芭蕉翁終焉ノ地」の石碑が立っています。また、浄土真宗大谷派の難波別院（「南御堂」）の庭に、この句の石碑があり、「芭蕉を偲んで毎年芭蕉忌が勧修され、法要の後盛大に句会が催されている」と説明版に書かれています。



## B級サラリーマン渡世譚(57)

明石 幸次郎

担当者の役割(韓国編)

明石はM居の「お前は、営業をやったことがないから、簡単に言うけど、値上げは、そう簡単に出来るものではないぞ!」ときつく言われて、頭に血がのぼったので、自分の考えを深く考えずに反論して話を収めた。

心の中では、値上げの難しさは百も承知や。そもそも韓国との再交渉をしなればならない原因を作ったのは、係長のM居さんじゃないですか。俺は偶々、M居の対応のまずさで、担当者になって、部の方針、命令で値上げをして来いと言われ、損な役割を演じているんですよ」と言ってやりたかったが、何とか抑えて大人の対応をしたつもりであった。

会社の中にも、色んなタイプの人間はいる。M居は、堺工場の時の上司であった「仲代達也」課長と似たタイプで、自分の器量、能力、容姿に絶対的な自信を持っていて、「仕事が出来ないのは、自分の力不足では無く相手が悪い、周りが悪い」と、自分を返り見ることなく、昇格して来たタイプで、明石は、自分とは違うタイプの人間だと感じて来た。

そう思うと、明石は楽になった気がしなかった。堺工場ですら来た様に、上司に頼らずとも自分の考えで仕事を進められると思った。今後は、自分のやり方に反対

される事は避けて、面倒臭くても、事前の根回しと、悪い情報だけは、早くM居に伝えておこうと考えた。

「〇時になった時、G本嬢が資料を抱えて戻ってきて「明石さん、ご指示された資料を借りて来ました。これで、宜しいですか?」と優しい声で、明石の横に立って言った。借りて来て貰った資料を確認して「有難う。処で、現代韓国の経済、社会事情」と「韓国の貿易事情」言うJETROが出した資料も借りてくれたの?」と言うと「そうです。資料室は開架式で国毎に区分されていました。今度、韓国に行かれますとお聞きしましたので、余分かも知れませんがお借りして来ました。それと、資料室に、明石さんとご同期と言われてましたが、人事部のM井さんが、明石君は真面目にちゃんと仕事をしてるか?と聞かれました「アイツがなぜ、G本さんが輸出部に居ることを知ってるの?」それは、輸出統括部のS藤さんの処によくあの方が、人事の資料を持って来られ、長い間、おしゃべりされているので、このフロアーでは、M井さんは、皆さんご存知ですよ」「へー、有名人や。S藤の処にか?アイツも同期や!それで、M井君に何と答えてくれたの?」と質問したら「頑張っておられますよ。転勤されてきたばかりなのに、来週水曜日から、韓国に出張されます。それで明石さんから頼まれました、資料を借りて来ました。とお答えしましたら、



えー危ないな。アイツを韓国に行かしたら？何するか分からんのでと、私には訳の分からない事を、笑いながら言われてました。面白い方ですね」

「そうか、悪い奴に話掛けられたなあ、暇つぶしに資料室で入り浸っているんやああ見えても人事部のエリートで、本当は賢いんやで、大学のクラブは落語研究会で、落語家みたいな話し方をするので、何かたぶらかされている様な、妙な気になるのやが？一度、アイツも交えて食事でもどうですか？」と気を利かせて、指示もしていない書籍まで借りて来てくれたお礼も含めて誘ったら、少し顔を赤らめて「はー。是非、又」とやんわりと断られた感じの返事が返って来た。

明石は気を取り直し、頭の中でストリーを考えたが、纏まらないまま、宇都宮工場のS沢に電話を掛けた。

「S沢さん、昨日は、有難うございました。処で、七月末の船積みの件なんです。もう、一週間ほど前倒しは出来ませんか？」と行き成り要件を伝えたら、「明石さん、昨日、輸出部の要望だということとで希望通り決めただけなんですのに、それは、難しいですよ！どうしてですか？又、韓国からもっと早くしてくれとの要望が来たのですか？」と、昨日とは別人の様な強い口調で言い返された。「韓国のD工業からではなく、東京のM商事ソウルからの情報で、ライバル他社は、日本から六月中旬に船積みする予定だと言う

ことで、この情報がD工業に入れば、又、

鄭常務から工場長に電話が入るかも知れませんので、前もって、全然駄目か、少しは前倒しが出来るか、事前に検討をお願いします！と、S沢さんに電話した次第です！それと、来週水曜日から私が韓国に行くことに急遽決まり、目的は工場長からも要請を受けた値上げの交渉です。その時に必ずや、納期を早めてくれと言う要望が出ますので、ゼロ回答したら、私は、帰って来れなくなりま

す」と勝手に自分で考えたストーリーを話して反応を待った。「そう、出張ですか。大変ですね。それに、電話の件ですが、工場長からも、鄭さんの電話は輸出部で抑えてくれと言われてましたわね。明石さん頼みますよ。それと、先方の納期は七月末船積み希望ではなかったのですか？」「そうです。よく分かってます。しかし先方は部品を買ってくれるお客さんです。その製造のトップからウチの製造のトップの工場長に電話をするなどは、言えませんよ。納期は、コロコロ変わるものではないですが、他社との動きで、韓国は早く作れば、販売が有利になるような市場のようです。それだけに、他社が早く輸入出来そうであるとすると、何とかしてくれとなります。それを見越して私の方から、先ず、窓口のS沢さんに、ご相談という事で電話した次第です。一週間位の短縮は難しいですか？」と明石は、若干の脅しと、こちらの言い分をや

んわりと伝えて、答えを待った。「明石さん、納期短縮は難しいですが、H課長と資材課のM本さんと相談して、返事しますので、昼まで待って貰えませんか？それと韓国からの電話の件は、是非、こちらで抑えて下さいよ！」と、困ったような声で回答した。

「電話の件は、分かりました。納期の件、再考お願いします。何でしたら、私からH課長に状況をお話しさせてもらいますか？」と言うとS沢ははつきりした声で「それは、いいです。纏めるのは私の仕事です！明石さんも転勤したてなのに、大変ですね」と最後は、明石に同情をしてくれた。

明石は、納期短縮などで工場をかき回すのは、ついこの前までは、かき回された経験上、本当はやりたくなかった。しかし、更なる値上げをしなければならぬ立場から、納期短縮しかカードがないと考えた。

## オクラの山たより(19)

一

困生

思いもかけぬ長談義となつていたので少しばかりおさらいをしておく。そもそも問題は「清少納言ときたらとんでもない人だったとか。あそこまで利巧ぶって漢字を書き散らかしていますけど、その学識の程度はしれたものですよ。……この人の成れの果てはよいはずはありません」という紫式部の清少納言への酷評はいつたどこからきたのか、というものであった。

まずあげたのは「政敵打倒説」。定子皇后の死後、十年たつても一向になくならない皇后の評判の良さ。いや、ただ評判が良いだけではなく清少納言の「枕草子」が世に出回ることにつれて、人々の間に定子皇后のサロンを懐かしむ心はより強くなり、その一方で相対的に彰子中宮の評判は下がっていく。それで「御主人様である中宮の評価が下がるのを、女房である私が黙って見ているわけにいかないじゃない」と立ち上がったのが紫式部だという話であるが、筆者はどうもピンとこないのがある。

そういう政治的な意図があつたということも一方的には否定できないが、紫式部がかなり本気で怒っていたのではないのか、という気持ちも筆者の心から抜けないのである。

先回、述べたのは紫式部の父親であつ



た藤原為時が当代一流の漢学者であり漢詩人であったということ。その優秀な文人学者である一方で世間を渡っていく能力に乏しく不器用で世に認められず不遇な日々を送った為時。その父親を紫式部がどう見ていたのか筆者にはよく分からない。しかし、漢学者の娘という自負は確実にあつたろう。また、清少納言との関係からすると、彼女の伯父や曾祖父のことにも触れておかねばならない。

父方の曾祖父は藤原兼輔である。醍醐天皇の時代に公卿となり天皇に娘の桑子を入内させた。この桑子を心配して作った次の歌が有名である。

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に惑ひぬるかな

父為時の母方の祖父、紫式部には曾祖父には三条右大臣こと藤原定方がいる。

彼は姉の胤子が宇多天皇の女御で醍醐天皇の母であつた。定方は甥である醍醐天皇の時代に従二位右大臣に至つた。兼輔と定方はとても仲がよく紀貫之や凡河内躬恒、清少納言の曾祖父である清原深養父らをかかわるがわる自宅に招いて和歌や管弦を楽しむなど当時の文化の世界のパトロン的な存在であつた。そうした機会に作られた和歌は「後撰集」に収められている。榮えある二人の曾祖父は紫式部にとつて誇りとなりうるものであつたらう。清少納言へあれほどの酷評ができた背景には「あの人の曾祖父のパトロンはわたしの曾祖父なんだからね」という思

いがあつたかもしれない。ただ、その思いと同時に彼女は現在の自分の家が受領層となつてしまった零落ぶりを痛感したことだろう。

また為時の父親である雅正、兄の為頼、為長は三人とも受領の階層であつたが、「後撰集」「拾遺集」「後拾遺集」に歌の採られる歌人であつた。つまり、紫式部の家は清少納言の家と同じく「和歌の家」といえるが、父為時はそれに逆らい文章生となつて漢学の道へと進んだ。妻の祖父である藤原文範の影響といわれる。だが、漢学の才能によつて出世をはたした文人官僚が活躍する世はとうに終わつており、文章道出身で従二位中納言にまで至つた文範とは違い為時は正五位下で終つた。

ついでにもう一言いっておけば、紫式部と結婚した藤原宣孝は藤原定方の曾孫であり、花山天皇に為時とともに仕えた経歴を持つている。年の差二十歳近い二人の接近には為時からの圧力がかなりあつたのではと筆者は考えている。

## 二

「紫式部日記」の女房たちの批評や紫式部の思いを記した部分は「消息体」といわれるが、そこには一条天皇が「源氏物語」の感想を述べたことに関わる記述があり、有名な箇所である。少々長くなるが、次のように記された部分である。

左衛門の内侍といふ人侍り。あやしう、すずろによからず思ひけるも、

え知り侍らぬ心憂きしりうごとの、多う聞こえ侍りし。

うちの上の、源氏の物語人に読ませつづ聞こしめしけるに、

「この人は日本紀をこそ読み給ふべけれ。まことに才あるべし。」と、のたまはせけるを、ふと推し量りに、「いみじうなむ才ある」と、殿上人などに言ひ散らして、「日本紀の御局」とぞつたりける、いとをかしくぞ侍る。この古里の女のの前にてだにつつみ侍るものを、さる所にて才さかし出で侍らむよ

左衛門の内侍という人がいます。妙なことに私を目の敵にしている、それにつけてもこちらには身に覚えがない不愉快な悪口が、私の耳にもたくさん聞こえてまいりました。

帝が源氏の物語を女房に朗読させてお聞きになりながら、「この作者は公の場で日本書紀を読み説いて下さらなくちゃならないな。

いや、実に漢文の素養がある様子だ」そうおしゃつたのをそのまま鵜呑みにして、「たいそう素養があるのよ」と殿上人にいふらし、私に「日本書紀講師女房殿」などとあだ名をつけたんですよ。まったく笑止千万でございます。家の女房の前ですらやりたいこともせず謹んでおりますのに、そんな日本書紀講筵などで素養をひけらかすのですか。

引用した文中で「読み給ふべけれ」は昔から議論のあるところであるが、一条

天皇が身分の低い紫式部に敬語を使っているのは紫式部の学才に驚いて冗談を言つて見せたと捉えるのが最近の説である。

「日本紀を読む」とは、この文章の場合、「日本書紀の講義をする」という意味である。「日本書紀」は九世紀から十世紀に大規模に講義された。それを「日本書紀講筵」という。それは宮廷の公的な行事として行われた「日本書紀」の講義と研究の会であつた。多くの上流の貴族の参加して博士の講説を中心にして活発な討論が行われたという。もちろん、平安時代の常識から見て日本書紀を講義したのは男性であり、女性ではありえない。

このことから、推測される天皇の心理は二重の驚きであつた。天皇が「源氏物語」から見て取つた紫式部の学才は見事なものであつたが、彼女は女性でありこの高い学才はまったく不似合いと言つてもいいほどに意外なものであつたということである。

だからこそ天皇は男性にしかできない「日本書紀の講義」という冗談を言ったのであり、また、さらに「参つた、参つた」と言うかのように「給ふ」という敬語を使って戯れて見せたと考えられる。つまり、天皇が言おうとしたのは「女ながらにこの学才とは恐れ入つた」という感嘆であり、「女性ではありえないことだが、この人には日本書紀の講義をしてもらわなくてはな」と冗談を言ったということなのである。

ここで見落とすことができないのは天皇の言葉が紫式部の学才を高く評価しているが、手放しで褒めているものではないということである。すでに述べたように能力の如何を問わず日本書紀の講義は女性には不可能である。したがってこれは女性であるが故の限界を前提とした冗談であった。

このことから紫式部は天皇の言葉を直接話法で記したといえる。すなわち、それによって天皇の言葉が冗談であることははっきりと示し、褒められたことは褒められたが、それは冗談であったと自らへりくだって見せたのである。

### 三

さて、引用した部分で紫式部のもっとも強く言いたいのは彼女に悪意を抱く内裏女房の左衛門の内侍への抗議であるといつてよいが、この後の「紫式部日記」の記述には漢詩文の素養についての紫式部の考えがよく出ていていると思うので、いささか煩雑ではあるが、その概略をまとめて書いてみる。

① 自分に漢詩文の素養があった理由を述べながらも、兄の漢学学習を聞いているうちに自然に身につけたもので決して故意に学んだものではないこと。そして、父の為時も女性の漢学修得には消極的な旧来の価値観の持ち主であったと記す。  
② ある人が「男ですら漢文の素養を鼻にかけた人は、ハツとしない」というのを聞いて「一」という漢字すら書かないふりをして

漢学の才能をひた隠しにしたという。

③ 一条天皇の言葉に触発されたか、中宮彰子が漢学を紫式部から学びたいという素振りを示したのに応え白居易(白楽天)の「楽府」を進講し、そのことを二人とも秘密にしたが、道長や天皇には自然に知られ二人からの援助を得られるようになった。そして、あの左衛門内侍には見つけられることなく、漢学の学習はもう二年になると記している。

こうして見てみると、ここに書かれているのは「自分には漢詩文の素養がある」ことの肯定とそれを「人前ではひけらかさない」ことを自分のポリシーとして厳守していることである。「②」では人の言葉として「男ですら漢文の素養を鼻にかけた人はハツとしない」と書かれ彼女はこれを肝に銘じたという。彼女は漢詩文の素養が使いようによつては誇らしいものであるだけではなく、自らを傷つける両刃の剣であることをよく知っていた。それを持ちつつ左衛門内侍のような悪意に満ちた女性もいる宮中でどうふるまうていくか。それが最初に示した部分と「①」から「③」の主題であろう。

つまり、紫式部は「自分には漢詩文の素養などはありません」といつているのではない。いや、むしろ天皇にも認められ、中宮彰子に白氏文集を進講するほどの漢詩文の素養が自分にあることをはっきりと示している。そして、その漢詩文の素養は「漢学者として正統なものである」ということ

も述べている。優れた漢学者の娘としての自負が顔をのぞかせている。

たとえば、一条天皇の言葉は「日本書紀」を講義できるほどだというものであった。何度もうがこれは本気で講師にしようというのではなく冗談であるが、その評価の内容は清少納言とはまったく違う。

この評価のされ方は、たとえば清少納言が周知の漢詩句を男性官人との会話にちりばめたり、有名な漢詩句での問いかけに当意即妙で応じたりして受けた称賛とはまったく質が違うものである。「日本書紀」の博士は公卿たちに日本の歴史を講義して政治の指針の一部を指し示す儒者である。紫式部は「源氏物語」に忍び込ませた自らの漢詩文の素養をそのようなものであると言っているのである。

このように見てくると「①」で書かれた漢詩文の素養を習得したいきさつについてもそうだと見える。彼女は自分の素養が類書(分かりやすく書かれた漢学の参考書)でお手軽に学んで男性との会話で知識を増やしたのではなく、儒者であった為時が息子に施した教育を聞いて身につけたというのであるから漢学の基礎から正統的に学んだと言っているのだ。そして、「③」の中宮彰子への進講である。紫式部が彰子に教えたのは白居易の「新楽府」五〇首であることは重要である。「新楽府」は男性官人との知的なおしやべりに役立つものではなく、文学を通じて人民の心を伝え政治に生かすという

作者である白居易の儒学的精神に貫かれた作品群である。

### 四

ここで遠回りとなるが、白居易と彼の「新楽府」について少し述べてみる。白居易の文学は「諷諭」と「閑適」を二本の柱とする。「諷諭」は世のあり方を批判したもの、「閑適」は私的な生活の感情を詠うたつたものである。そして諷諭詩のなかでも代表的なのは「新楽府」五〇首であった。以前から作られていた楽府作品の多くは恋を歌う叙情詩であり、詩は政治に対する意見を含むことによつて存在意義があるとされた認識からすると正統な詩からは遠かった。白居易はそれを改めて儒教の倫理という基準によつて政治・社会への批判の内容を籠めるといふ新しい楽府としたのである。これが「新楽府」である。

有名な作品の一つに「新豊折臂の翁」がある。これは若いときに兵役を逃れようとして自ら腕を折った男が不具の身のまま老いに至ったストーリーを繰り広げるもので、作品に付けられた「序」には「辺功を戒むるなり」、つまり対外拡張政策への批判であると記されている。

ただ、実際に読んでみると分かるのだが、戦争を国家の悪として糾弾するといった内容よりもこの詩の中で語られた老翁の人生に対する感慨に読む者はすつぽりと包まれてしまう。それは具体的な個人の姿が見えるように、そして声が聞こ

えるように描き出し、その境遇に共感を呼び起こすのが白居易の諷諭詩であり「新樂府」だからである。「新樂府」の一つ一つの作品が独立した短編小説のような物語性を備えており、その中で描かれた人物像が読む人に迫ってくるようになってきている。政治や社会への批判を含んだ短編小説は、描かれた人物像がくつきりしていればしているほど、読む人の心にその批判はしっかりと残るにちがいない。そうすると、この「新樂府」を紫式部が彰子中宮に進講していることの意味はどうなるのだろうか。彰子は一国の中宮であり、その夫は一条天皇である。

彰子の夫である一条天皇は道長に圧迫され続けた無能な天皇というイメージがあるが、決してそうではない。時には道長との間の協調に困難を感じたかもしれないが、貴族たちの日記からうかがわれる政治への彼の指示の細かさ、的確さ、そして具体性は明らかである。一条天皇には政治への強い意欲が感じ取れる。彼は平安時代四〇〇年を通じてみてはかなり優れた天皇であったと言つてよい。この一条天皇の政治に対する基本的な考え方は「書中に往時有り」という彼の漢詩の末尾によくあらわれている。

#### 多年稽古属儒墨 縁底此時不泰平

多年稽古し儒墨をおさむれば、底たてに  
りてか此の時泰平ならざらん

多年にわたつて儒家の学問と「非攻」を唱えた墨子の思想を学び習得すれば自分の

治世は泰平な世になるはずだ、という言葉には一条天皇の生真面目な姿勢を示しており、また、儒学や墨子の思想を基盤にした自らの執政への気概の高さも見える。当然のことながら、こうした一条天皇にとつて白居易の「新樂府」は漢詩文の学びから得た大きな精神的な柱であったにちがいない。ここに紫式部が彰子に「新樂府」を進講した意味が見えてくる。

彰子中宮と一条天皇という国のトップに立つ二人が相和するか否かは直接に政治に関わることである。紫式部が進講することにより生真面目に政治に取り組もうとして悩む夫の心を妻である彰子が理解し夫の世界に寄り添っていけるよう手助けしていくこと。いや、もつとはつきりと言え、白居易の「新樂府」を通じて彰子に彼女が学ぶことができなかった儒学を授けていくこと。そこにこそ紫式部の進講の意味があつたのである。

これは晴れの公の場で公卿たちに日本書紀の講義をするという形からはかけ離れた、女性二人だけでひっそりと持たれた講義であつた。しかし、やがて国の母となるかもしれぬ中宮に儒学という政治理念を与えていくきわめて政治的といえる奉仕である。ここに紫式部が自分の漢詩文素養をどう生かしていくについて彼女の考えた具体的な姿が見える。

紫式部は男性官人（官人とは官僚、または役人のこと）と比して同等以上の正統的な漢学の才を持ち、そして男性官人たちと

まったく違った場所・かたちで確実に政治に生かしているという自負をもっていたのではあるまいか。その自負があるゆえに漢学の才を周囲の人に「ひけらかす」ことを人一倍避け、同時に他の人がそうすることも嫌つたのかもしれない。

#### 五

正統な漢学者の娘であり自発的に家学を学んできたという自負、男性官人と同等以上の漢詩文の素養を持つているという自信、そして、将来は国母となるかもしれない彰子中宮への二年間をこえて人知れず進講をしたという実績。そのようなことを述べてきたが、紫式部による清少納言に対する酷評で見落とせないのは一条天皇時代の漢詩文の状況である。

よく知られているように奈良時代に成立した漢詩集「懷風藻」によつてスタートした日本漢詩の歴史は嵯峨天皇の時代、九世紀前半に「国風暗黒の時代」といわれるほどの隆盛期を迎える。「文華秀麗集」などの勅撰漢詩集が編纂され、小野岑守らの文人官僚が活躍し有智子内親王という女性ながら漢詩を後世に残す詩人もあらわれた。その後、島田忠臣、菅原道真という平安時代屈指の漢詩人が現れるが、撰閲家が成立し漢学の才が社会的な地位上昇につながらなくなると漢詩文は一時的に衰退する時期を迎える。しかし、一条天皇のころに再び漢詩文隆盛の時期を迎える。ただし、以前の漢詩文とは異なる傾向が出て来ていた。たとえば

菅原道真の漢詩は杜甫・李白・王維といった唐の詩人たちと比べても遜色のないものであるが、この時代の漢詩はいささか異なる。川口久雄氏は一条朝の漢詩の特徴として次の三点をあげる。

- ① 漢詩にとつて必須ともいえる政治・社会への批判精神の喪失
  - ② 「白氏文集」などの表現・発想の一部を流用する表現の類似性と退廃性
  - ③ 他人の詩と同じ韻を用いて作つた和韻の詩や貴人のために作つた奉唱の作の多さ
- つまり、この時代の漢詩文は権力を持つ人々に強く嗜好されていたが、嵯峨天皇や村上天皇の時代そして花山天皇の時代には一部の官人まで有していた「漢詩文は」経国の大業」という意味合いを失つて宮廷の官人を中心とした狭く閉鎖的な世界の中で権力者に対する無批判的な讚美か、さもなければ自己の栄達の希望懇請を詠み合うものになっていくことである。この変わり果てた漢詩文のあり方を川口久雄氏は当時の人々の「風流韻事（詩文を作るといった風流な遊びのこと）」のアクセサリと化したと述べ、増淵勝一氏は「儀式的遊戯」と呼んでいる。要するに一条天皇の時代における漢詩文は、漢詩がかつて持っていた高次の政治的・学問的色彩を失つて優美を競う一種の芸能、貴族の特技と化していた。言葉を変えれば漢詩文が貴族の生活の中で私的・遊興的な場を占めるようになったということである。

よく知られているように平安時代における社会全体の意識の中では漢詩文の素養を下敷きにした和歌が詠まれることがあつても女性にとつて漢字漢文は別世界のものとしていた。漢字・漢詩文は公的な場で活躍する男性たちのものであり、女性たちは仮名をつかう私的な世界に自分の居場所を見出していたのである。しかし、漢詩文が私的な性格を帯びてきたとなれば、社会全体の意識も変化していく。「漢詩文の素養を持つ女は良くない」という意識は変わらずに存在し続けたろうが、それに加えて、漢詩文の素養を女性にとつても知的な「おしやれなもの」という風潮が一条天皇の時代に突如として現れたのである。男性の世界で詩句や故実について本格的な学習を経て習得したのではない、「類書」といた手軽な漢詩文の参考書で身につけたような浅く広い知識が好まれ始めたのである。それが日常の会話や消息などを媒介にして女性の漢詩文の素養の傾向にも影響を与えるといった形であらわれた。私生活で男性と付き合い渡り合つていくには女性にも一定の漢詩文素養が当り前に必要となつたということである。

彰子が漢詩文の素養を身につけたいという素振りを見せたのはそうした風潮が背景にあつたためでもあろう。漢詩をお互いに作り合つて楽しむ詩宴を何度も開いた藤原道長であるが、娘にはおそらく漢詩文教育を怠つていない。彰子は社会常

識以上に学ぶことの必要性を感じて紫式部から漢詩文を学ぼうとした。道長がその学習を応援したのは彰子が社会の常識に従うよりも学習した方が天皇の寵愛を受けやすく道長にとつても有利だつたためである。この彰子と道長の親子をみると女性の漢詩文の素養を嫌う、あるいは女性から漢詩文を遠ざけるといふ価値観が貴族社会一般にあつたこと、また事情によつてはたやすく無視できる価値観であつたことという二つの事実を示唆していてもおもしろい。

それはさておき一条天皇の時代に漢詩文は隆盛を極めた。しかし、それは本格的な漢学にとつては尊重というよりむしろ抑圧の時代であつた。

ひよつとしたら撰家などの権力者は漢学者と政治の表舞台となる公的な世界との分断を図るために漢詩文を私的な世界に封じ込めようとしたのかもしれない。漢詩を作り合う場は修養の場から遊興の場へと変じた。付け焼き刃の漢詩文の知識で世の流行に乗る人々が多く出てきたのである。「才がりぬる人はいかにぞや、はなやかならずのみ侍るめるよ(漢文の素養を鼻にかけた人はどうでしょうか、皆ばつとしない人ばかりとお見受けしますよ)」と「紫式部日記」に書かれている「才がりぬる人」とは、この時代に蔓延していたこうした軽薄な人々ではなかつたか。たぶん紫式部はこういう人々にはウンザリしていたはずである。

しかし、私的な日常生活に入り込んできた漢詩文は、その私的な性格のために女性の生活にもより近いものとなつた。必要とされる知識量の減少・表現の類似性の許容など、他の時代に比して漢詩文から疎外されてきた女性にも理解・参加しやすく、また時代の風潮もそれを許す面があつた。男たちがおもしろがつて口にする詩の一節を女が共通の教養として理解し、それに当意即妙に応えるということ

は一条天皇の時代にあつては非難されることではなかつた。むしろ要求された行為であつた。というのは、それは男女ともにあくまでも私的な生活の中で楽しくなされる「風情ある、しやれた会話」であり、政治的には何の責任を追及される心配がなかつたからである。

いうまでもないことだが、このことは宮中の女房たちには大きな影響を与えた。男たちにとつては私的な世界にすぎない場所が彼女たちにとつては「働く場」であり「生きる場」であり、いわば女房たちの公的な場である。そこでよりよい立場を得るための自己アピールの手段として、漢詩文の素養がにわか許されることとなつた。多少なりとも漢詩文の素養のある女性がより幸福になろうとしてそれを積極的に利用するのは当然のことだろう。しかも、要求される素養は広くはあるが断片的かつ浅いもので十分であつた。自らの機知の力をテコにして、彼

女は一条天皇の時代に最も適した女房であつたのである。そんな清少納言を紫式部が十分に理解し「よく頑張つてゐるわ」と評価できたかどうか。「できた」と言い切る自信は筆者にはない。

ここまでのいろいろと書いてきたのだが、手軽な漢詩文をのびのびと楽しみ、さほど深くもない漢詩文の素養をひけらかす清少納言。紫式部が「カチン」ときて、心のどこかで「あんな人は絶対ろくな死に方をしないにきまつてゐるわ」とブツブツ言つていたという考えを筆者が捨てがたいのは、おおよそ以上の理由である。

## 六

最後に清少納言の周辺での漢詩文の扱われようを述べておきたい。

一条天皇の時代においては女性と漢詩文の素養についてダブル・スタンダードが存在したことはすでに述べた。漢詩文について女は疎遠でなければならぬ。しかし、一方ではある程度は親密でもよい。そんな微妙な状況が一人一人の女性によつて微妙な対応をなさしめた。清少納言は場によつて漢詩文への親疎を器用に使い分けた。「源氏物語」の作者である紫式部は物語の語り手という立場によつて「漢詩文の素養を使いまくつてゐるじゃない。見せびらかしてゐるみたいで、嫌ね」という非難から自分の身を守つた。女性たちを縛つた一条朝のダブル・スタンダードは当時としてはごく一般的であり、女性たちは日常的にそれと付き合い

上手にかいくぐっていったのである。

結局、紫式部の清少納言への「真名書き散らし云々」の非難は学識の不足にあるといえる。たとえば、すでにかつて述べた「枕草子」にある「香炉峰の雪」の章段にしても清少納言は定子から認められ「さすが」「すごい」と周囲の女房たちから絶賛されたが、詩の内容をまったく取り違えている。それは清少納言だけの間違いではなく彼女を褒め讃えた定子サロン全体の間違いである。その場で求められているのは漢詩文への正確で深い理解ではなく、浅くても詩句に根拠のある機転をきかした言動であったのである。

こうした言動についての例をもう一つ。「枕草子」の「大納言殿参りたまひて」に書かれた内容である。

清涼殿に隠されていた鶏が深夜に大声で鳴き一条天皇をはじめとして多くの人が目を覚ました。藤原伊周が「声、明王のねぶりをおどろかす」と声高く吟詠し、それをタイミンクの良い朗詠だと天皇も定子もおもしろがり、清少納言も「めでたけれ」と褒め讃えている。「声、明王の……」は和漢朗詠集にも採られている都良香の「漏刻策」の句「鶏人曉に唱ふ 声、明王の眠りを驚かす」の後半部である。良香の詩は文章得業生の試験の問題に答えた対策、つまり答案である。対策では政治に関わる問題について議論することを求められる。良香の詩でも「鶏人」は時を告げるれつきとした官人のことであり、彼によつ

て正しい時刻に天子を起すことにより

時刻が正しく掌握され政治が正常に進められていくというのが本来の意味である。しかし、伊周はこの詩句のそういう本来の意味をまったく無視して「鶏人」ではなく「鶏」そのもの声で天皇が起きたと笑いを取ろうとしたのである。一条天皇を「明王」と持ち上げているが、それだけである。だが、天皇も定子もおもしろがったというから彼の「ギヤグ」は成功したのである。漢詩の一部をお笑いのネタとしてその場の笑いを取ろうとする伊周の姿勢は「香炉峰」の清少納言や定子のそれと大きく変わるものではない。そこに共通しているのは漢詩文の素養を発揮することは日常生活の会話を知的上質なものにしていく趣向であり、その本質は遊興だという認識である。

以上のような浅い漢詩文の素養にもとづいて、その場を盛り上げ楽しみ合う状況を聞いたり読んだりしたとき、紫式部はいったいだんな顔をしたのだろうか。「それもありかな」と微笑んだか、「これだから嫌になるのよね」と渋い顔をしたか。たぶん後者であつたらう。

### 【補足】

◇ 藤原定方（三条右大臣）の和歌

女につかはしける

名にしおはば逢坂山のさねかづら

人に知られで来るよしもがな

「逢坂山のさねかづら」が逢つて寝ると

いう名をもっているならば、そのさねか

ずらを手繰るように誰にも知られずに  
来る方法があればよいのになあ

「後撰和歌集」に収められた歌であり、「百人一首」にも採られている。「くるよしもがな」の「くる」は「来る」と「さねかづら」を「繰る」との掛詞だが、詞書に「女につかはしける」とあり女性が贈った歌とあるので、当時の「通い婚（男が女のもとに通う）」の習慣からすると理解がしにくくなる。この歌の「来る」は女性の側に立って詠んだものだという解釈も最近はあるらしい。

◇ 紫式部の伯父藤原為頼の和歌

世の中のあらましかばと思ふ人

なきが多くもなりにけるかな

この世にも生きていたらなあ、と思う人で、亡くなった人が多くなつてしまったことなあ

花山院が撰歌した『拾遺和歌集』に収められた歌である。長徳元年（九九五）に伝染病の流行で関白道隆をはじめとして多くの人が亡くなった悲しみを歌つたという。悲哀感を平明に表現するのは「拾遺和歌集」の特色とされる。この歌は詠まれてすぐに評判となり、藤原公任はさつそく「和漢朗詠集」に採つており、後の「狭衣物語」引かれたり「采花物語」にも紹介されたりしている。



## 邪馬台国と火の国（1）

満田 正賢

前月号の編集後記に「邪馬台国はどこにあつたのでしょうか？興味津々です」とありました。そこで私が独自に展開した邪馬台国論を紹介させていただきます。この論は全体としては未発表のものですが、大半の内容については「古田史学の会」の例会で発表したものです。

「古田史学の会」は一九七一年に「邪馬台国」はなかった」という本で古代史ブームをおこした古田武彦氏が主催した会です。古田氏は二〇一五年に逝去されましたが会自体はその後も古田氏が提唱した多元的古代史観・九州王朝説の立場で活発に活動を続けています。

（はじめに）

邪馬台国の位置がどこであつたかについては、江戸時代より畿内説と九州説に分かれ論争が続けてきました。最近では奈良県桜井市にある箸墓古墳の調査が進み、箸墓古墳は三世紀の古墳であり卑弥呼の墓であるという考古学者の意見が畿内説を後押ししているようです。確かに考古学者が主張するように日本の古代の姿の全体像をつかむ為には日本各地に残る遺跡を発掘しその遺跡の内容を検証することが最も重要です。しかし、邪馬台国はあくまで三国志の魏志東夷伝に記載された国であり文献史学の立場で論ずべ

きものです。邪馬台国がどこにあったかという問題に限っていえば考古学は文献史学の考察の裏付けに利用されるべきものです。

「魏志倭人伝」に記述されていることは、魏の国の出先機関(帯方郡)の役人が「倭国」を訪れた際に自分が見聞したことを記した出張報告(行政文書)を三国志の編者・陳寿が編纂したものであり、日本全体で見れば一部の地域のことを少ない情報量で書いたものです。

しかし魏志倭人伝に記載された内容そのものはいく加減なものではありません。東夷伝の前文には、「今まで公孫氏によって阻まれていた東夷の調査が公孫氏の制圧によって可能になった。東夷の国々をくまなく観察して回りその掟や風俗、国の大小などが詳細に記録されたので、これまでの史書に欠けているところを補いたい」と記載されています。なぜ三国志の編者・陳寿は東夷伝を記述することができたのか。なぜならそこには信頼できる行政文書があったからであり、その行政文書を書いた役人は自分の見たこと、聞いたこと、確かめたことを素直に記載していたからです。中国の文書行政は前漢の時代にはすでに辺境の各地に行き渡っています(注1)。陳寿は晋の書庫に保管されていた東夷関連の行政文書の内容を信頼できると認めたからこそ各行政文書を「編纂」して東夷伝を書こうと決意した。このような見方で魏志倭人伝を讀

み解くのが私のスタンスです。

魏志倭人伝の記述をいい加減なものとする論者の根拠の一つは、魏志倭人伝に記載された距離でははるかに日本を越えてしまうということです。畿内説では方角の「南」は「東」であるという解釈を付け加え、距離的にも適合しない大和を邪馬台国に比定します。したがって魏志倭人伝に記述された距離も方角もすべてが正しいと考えるためには、そこに記載された「里」が後述する七六〇七七メートルの「短里」であったという前提が必要になります。

私自身は私の説を古田武彦氏の提起した多元的古代史観及び九州(筑紫)王朝説を補完するものと考えていますが、邪馬壹(台)国の場所の推定においては古田説とは全く異なる結論となっています。

古田氏は『「邪馬台国」はなかった』の中で、伊都国を糸島半島前原近辺、奴国を糸島半島平野部、不弥国を博多港付近とした上で、邪馬壹国は不弥国の南に広がる福岡平野一体であると考察しています。不弥国と邪馬壹国の距離はゼロであったからそこに距離の記載がなかったという解釈です。そして「水行十日・陸行一月」というのは帯方郡の郡治から邪馬壹国までの総行程日数の記載であり、「萬二千余里」とイコールだと考察しています。

私の説が古田説と異なるポイントは次の三点です。

① 魏志倭人伝に記述された伊都国はイツ国と発音し糸島半島ではなく吉野ヶ里周辺にあった。又、邪馬壹(台)国は八代周辺にあった

② 漢代に「漢倭奴国王」の金印を下賜され、そのお札に生口一六〇人を献じた「倭国王帥升」と「女王卑弥呼」はつながっていない。

③ 卑弥呼の統治していた国は火(肥・白)の国である。すべての論理展開の結果として魏志倭人伝で示された女王の統治範囲はまさに後の肥国の範囲と一致している。

本論によって女王の都・邪馬壹国の新しい姿が見えます。それは短里説を前提としたものですが、その他には魏志倭人伝の無理な解釈をいっさい必要としないものです。

第一章 魏志倭人伝の記述内容を考察する

一・「邪馬壹国」と「短里」二つの前提  
魏志倭人伝の検討に入るにあたって、二つの点を明確にしておきます。どちらも古田氏が「邪馬台国」はなかったと指摘した点です。

第一の点は、現存するすべての三国志の古写本・版本には「邪馬壹国」ではなく「邪馬壹国」(或いは邪馬一国)と記載されているという事実です。古田氏はこの事実の論証、そして「邪馬壹国」が「邪馬壹国」の誤記や混同でないことの論証

に膨大な作業を費やしました。従来の邪馬台国論争は「邪馬台IIヤマト」という前提に立って、ヤマトという名前の付く場所を近畿の大和や九州の山門に比定して論争するものでしたが、「邪馬台国」が「邪馬壹国」であれば検討の様相が変わります。様々な邪馬台国論の中には参考にすべき意見も多くあります。その多くの邪馬台国研究者の意見も取り入れてこれから邪馬壹(台)国の検討を進めていきます。

第二の点は、魏志倭人伝に記載されている「里」は「短里」であったという点です。古田氏は、朝鮮半島南岸から、対馬、老岐までの各距離(各千余里)の記述、そして「韓」の国の面積(方四千里)の記述から考えると七五メートル〇メートルの短里が用いられていたと考えざるを得ないと結論付けました。この「短里」の存在を実証した研究として、谷本茂氏の「一寸千里の法」の研究があります(注2)。谷本氏は中国最古の天文算術書である「周髀算経」の中に「周髀」という八尺棒で夏至の日に陰の長さを測ると周の地で一尺六寸、南千里の地では一尺五寸北千里の地では一尺七寸になる」という記載を発見し、これを検証した結果一里は七六〇七七メートルとなることを実証しました。これは古田氏が提唱した七五〇九〇メートルの「短里」の存在を証明したものです。一方で短里の自然史的な検討も進んでいます。正木裕氏は

「秦の始皇帝の度量衡統一以前の中国の尺度のうち「寸・尺」は「手の系」、「歩・里」は「足の系」という別系統であった。漢字が成立した殷の時代の「歩」は足長の二五〜二六センチであり三〇〇歩が一里という始皇帝の度量衡統一基準で計算すると「里」は七六〜七七メートルの「短里」とびったり合致する。なお人足測定には「歩」の三倍でありほぼ人の一歩の歩幅に相当する跬という単位が使われていた」と考察しています(注3)。

私は正木氏という「跬」という単位こそが「歩」ではなかったかと考えています。すなわち殷の時代には片足を踏み出した時の一歩こそが「歩」の単位であり、百歩を「里」と表現していた。自然的な観点からみると左右の足を踏み出した時の二歩を「一歩」とし三百歩を「一里」と定めた秦の度量衡より、一歩を「一歩」とし百歩を「一里」とする測定法の方がよほど自然発生的なものではなかったかと思われるからです。

## 二、「短里」の使用に関して

私は、三国志の編者陳寿は「短里」の存在を知らず、当然秦の始皇帝以降使われてきた「長里」で記載されているものだとして各地方の行政文書に記載されている数字をそのまま書き写したのであるかと考えています。なぜならば、度量衡の改定というのは国家収入に関わる重要な案件です。だからこそ秦の始皇帝が

度量衡を統一し、その後「漢書律歷志」

によって明文化されたのです。その後の中国の史書に度量衡の変更「長里が短里に変わった」という記述も「その後短里が長里に戻った」という記述もありません。従って、現代の中国人で魏・晋の時代に「短里」が使われていたという見解を受け入れる人はいないと思います。

ところで、この問題に対する有力な回答を得ました。半沢英一氏の「邪馬台国の数学と歴史学―九章算術の語法で書かれていた倭人伝行路記事(ビレッジプレス)」という書籍です。この本の中で半沢氏は以下の考察をしています。

① 魏晋代に編纂されたと思われる数学書「九章算術」に「周髀算経」の「一寸千里の法」によって解ける例題と回答が載っており、魏晋代に「短里」が使われた痕跡がある。

② 魏の受命改制(周代の古制の復活)によって周代の「短里」制が一時的に採用されたが、漢代の度量衡との間で混乱をきたし、「短里」制はあっさり消滅した。そして明帝の夭折やその後の政争により「短里」制の一時的採用については不祥のこととして言及が避けられた。

③ 帯方郡の使者「建中校尉梯儁」が倭国を訪問した正始元年(二四〇年)は明帝崩御の翌年であり、報告書は「短里」で記載するよう魏の指示を受けていた。さらに海上での里数の測定には実際に「一

寸千里の法」が用いられた可能性がある。

この半沢氏の説は、邪馬壹国の場所推定を考察する上でも重要な視点となりました。

## 三、三国志の編者「陳寿」

陳寿の生きた年代と魏志倭人伝の中にある出来事との相関を年表で追ってみます。

二一三年 陳寿、蜀領であった、四川省巴西郡安漢県に生まれる。若くして高名な歴史学者譙周に師事し、蜀の書記官・観閣令史となるが、間もなく免職され、蜀滅亡後もしばらく仕官できなかった。

二二八年 倭女王卑弥呼、難米を魏に遣わす。

二四〇年 魏使梯儁、詔書・印綬などを倭王に賜う。

二四三年 倭女王、伊声耆・掖邪狗など八人を魏に遣わし、生口・方物を献上。

二四七年 卑弥呼、戴斯烏越らを帯方郡に遣わし、狗奴国との不和を説く。魏廷、張政などに詔書・黄幟をもたらし、檄をもつて告諭す。卑弥呼

死す。宗女の壹与、王となる。

二六六年 倭人、晋に使者を遣わし、方物を献上す。

二七〇年 陳寿、歴史書「益都耆旧伝」等を発表。魏に禅譲された晋の武帝に認められ、著作佐郎(歴史編集補佐官)に任命される。

二七九年 晋、呉を討伐し、翌年天下統一する。

二八〇年 陳寿、三国の資料を集め、魏志三

十卷、蜀志十五卷、呉志十卷にまとめる。

二九七年 陳寿死す。

陳寿が、二六六年の倭人(壹与の使者)に直接会って話を聞いた可能性はありますが、卑弥呼の時代の交流については、当時まだ蜀領にいて十代前半であった陳寿に情報が直接入ってきたとは思われません。何より陳寿は第一級の歴史家です。倭国の使者の言葉をそのまま検証なしに倭人伝に記載したとは思えません。

## 四、魏志倭人伝の構成と元資料

魏志倭人伝は正式には「三国志・魏書・烏丸鮮卑東夷伝・倭人条」と言うのですが、魏志倭人伝は大きく三つの構成になっていると考えます。この考え方も邪馬壹国の場所を推定する上で大きな要素になります。

① まず冒頭の過去の史書(漢書地理志)から倭人の場所を紹介した部分です。

倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時有朝見者。今使譯所通三十國。

② 次に魏志倭人伝の大半を占める倭国の地理と風習の記載です。

從郡至倭、循海岸水行、歷韓國、乍南乍東、到其北岸狗邪韓國、七千餘里……其犯法、輕者没其妻子、重者滅其門戶及宗族。尊卑各有差序、足相臣服。

③ そして最後に陳寿自身が魏(晋)の書



庫に残る各種文献・行政文書をもとにまとめた部分です。

景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都……壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還 因詣臺 獻上男女生口三十貢白珠五千孔 青大句珠二枚 異文雜錦二十四

陳寿が魏志倭人伝に記載したもののうち、②の部分は当時すべて陳寿が閲覧できる立場にあった魏・帯方郡の行政文書（伊都国に駐在した帯方郡の郡吏の報告書、および帯方郡の邪馬壹国使節団の報告書）に従ったものと思われる。具体的には正始元年（西暦二四〇年）に倭国に派遣された中校尉梯儁の報告書と正始八年（西暦二四七年）に倭国に派遣された塞曹掾史張政の報告書から抜粋されたものと推測出来ます。

### 五. 魏志倭人伝の編纂に関する考察

(1) 帯方郡から不弥国までの方向、距離の記述は、伊都国に駐在した官吏の報告書に記載されていた記述であり、官吏が正確度を高めるために検証を重ねたものと思われる。特に方角については当時でも太陽の運行で正確に判断できるものであり、間違いがないと考えるべきものです。

女王（国）の実際の中心地は遺跡の分布状況から見ても北九州であることは間

違いありません。しかし女王の都「邪馬壹国」は女王の統治範囲からみると中心地から見るかに離れた南の地域にあったと思われる。その為、伊都国に一大率が置かれ、一大率が実際の政治を取り仕切っていました。女王の都と離れていなければ伊都国に一大率が置かれる理由がありません。

魏志倭人伝は、卑弥呼には夫がなく、「鬼道」を使い、殆ど誰とも接触しないと記述しています。又邪馬壹国には別に政治を取り仕切る役人が配置されています。卑弥呼のイメージにぴたり合う例は伊勢神宮の「斎宮」です。女王の都・邪馬壹国の場所は、倭国の政治的・文化的な中心地ではなく、「斎宮」がいた場所であったと考えて考察を進めるべきと考えます。

又女王（国）に派遣された魏国（帯方郡）の官吏は一名だけではありません。女王（国）には十名を超えるメンバーが派遣されていたものと考えべきです。その中で女王に朝見するという特別の目的を持ったメンバー以外は伊都国に駐在していたことが想像出来ます。彼らの中にいわゆる「書記」役の官吏がいたことも十分に想像出来ます。

(2) 不弥国から先の記述については、女王国を実際に訪問した使節団の出張報告書からの抜粋であったと考えられます。使節団はおそらく一度だけの長旅をしたのでしよう。彼らは女王の官吏に引率さ

れ舟で不弥国から女王の都に向かい陸路を使って奴国（伊都国）に戻ってきた。

陳寿としては、不弥国から女王の都までの行程は、使節団の出張報告書に記載されている概ねの方角と実際に費やした日数を記述せざるをえなかったものと考えます。―続く―

(注1) 「文書行政の漢帝国」 名古屋大学出版会・富谷至

富谷至によると前漢の時代にはすでに中国の文書行政は辺境（例として敦煌）まで行き渡っている。前漢の時代には行政文書は主に木簡・竹簡に記述されているが、後漢の時代に蔡倫が紙を發明（実際には普及の為の改良）しており、魏（帯方郡）の使者が、倭国の国情を記載するため紙を用意して渡航した可能性は極めて高い。

(注2) 中国最古の天文算術書「周髀算經之事」数理科学No.177MARCH1978・谷本茂 (注3) 「邪馬壹国の歴史学」 古田史学の会編ミネルヴァ書房・正木裕



## AIBOがピザを作る日

大江 雉鬼

日中の気温も高くなってきたので帽子をかぶって出かけようか。戸外は意外と陽射しが強いのでサングラスをかける必要もあつたかなとさえ思う……と、何気に気象レポートっぽい話をしているわけだが、実はそんなことを書くつもりは毛頭ない。ある名詞が使われた時、それが必然的に要求する動詞があるということが、今回のテーマである。帽子であれば「かぶる」であり、サングラスであれば「かける」、こうした繋がりはどうやって起きるのだろうかという関心である。前回は、日常的によく使う言い回しなのに、立ち止まって考えると、厳密な意味や由来のようところが分からなくなっているものがあるという話だった。今回のも広く言えば、その流れになる。帽子はなぜ「かぶる」のか、サングラスや眼鏡はなぜ「かける」のか、傘はなぜ「さす」のか、等々である。銀行に押し入った強盗の特徴を報告するにしても、目出し帽をかぶってサングラスをかけたと言ふと、いかにもそれっぽく、どこにでもいる強盗めいてくるが、目出し帽をつけてサングラスを着ていたと言ふと、それだけで余人と紛うことのない個性的なものになる。と、こんなことを書いていくのだが、考えれば面白い話である。

唐突な引き合いになるが、御伽草子の「鉢かづき」にご登場願う。継子虐め譚を代表する昔話でもある例の話だ。この昔話を持ち出して、何故に「鉢かづき」なる表題なのかと問うとすれば、主人公が本来は「かづく（すっぽりと頭にかぶる）」ものでない鉢をかづいているからであり、それが主人公の特徴そのものであるところから彼女の名前となり、話の表題となったのである。鉢をかづくということがそれだけ特異な行為であるわけだ。その特異性は、名詞と動詞のあるべき繋がり方が壊されたところから生じている。その点にこだわるなら、壊されて初めて関係の強固さが浮かび上がる繋がり方が、本来はあったのだと言えるだろうし、その意味を考えるのはけっして無駄なことではない。このように、当たり前と思われる事象も、掘り下げていけば、見えていなかった何かが見えてくることもある。

「帽子をかぶる」に代表される、装身具を含めた服飾関連のものであれば、「つける」「きる」のようなオールラウンドな動詞がある一方で、「かぶる」や「はく」のように限定的な装着方法を表現する動詞も存在し、そして帽子、ズボン、スカートがそうした装着方法をもつぱらとするので名詞と動詞の間での限定的な結びつきが生まれた、というのなら一応は筋の通った説明にも聞こえる。だが、帽子だのズボンだのスカートが日本語の語彙に含まれるようになったのは、そんなに古い話ではない。帽子に似たものだったり、形状がスカートに通じる装束は古くから存在したが、「帽子」等々の名詞で表現されるものが広まったのは比較的新しい。名詞の方が後から生まれたのだとすれば、特定の動詞がその名詞のために使われるようになったのではなく、すでにあった動詞の中から、繋がり自然而然に落ち着くものを絞り込んでいったと考えた方がすつきりする。こうした話は具体的な用例を並べて検討せねばならないので、今の段階では単なる思い込みに過ぎない。だが帽子は「かぶる」と最初から決まっていたと考えるよりは、「つける」だの「のせる」だの様々な結びつきが試されつつ、次第に「かぶる」が多くを占めるようになったと考えておきたい。

さて、こんな具合での名詞と動詞の繋がりを、時代とともに移り変わる新技術についても考えてみたい。たとえば遠方の人と会話をする道具である電話。「電話をする」や「電話で話す」などは普通に使われる言い回しだが、より広く用いられるのは「電話をかける」である。それでは、今でこそ自然に聞こえる「電話をかける」という表現が定着したのは、言い換えれば電話はかけるものであり、かかってくるものであるという認識が確立したのは、いったいいつ頃だろう。この問いは「日本で初めて電話が『かけ』

られたのはいつ頃？」という形に書き換えることもできる。そして、それは、もちろんのことながら、通信技術の発達史を問うているのではない。電話という通信技術を用いて、遠方の人と会話することを「かける」という動詞で表現するようになったのはいつ頃からかという問いなのである。

ちなみに、ランダムなピックアップに過ぎないのだが、漱石の『それから』には「電話を掛けてくれませんか」という表現が用いられている。電話のサービスが開始されたのは一八九〇年（明治二十三年）であり、朝日新聞紙上でかの小説が連載されたのは明治四二年である。技術の浸透に要する時間を考えるなら、それなりに早い段階から電話と「かける」は親和性を見せていたのかも知れない。なお『それから』では、漢字は「掛」が用いられているが、「架電」という熟語を考えると「架」の方が適当なように思われる。掛ける、架けるの両方とも、離れているものに作用を及ぼす」というニュアンスだが、架けるの方は架橋＝橋渡しのイメージもあるので意味を実体的に理解しやすい。

この「電話をかける」については、明治の二〇年代や三〇年代の文献をしらみつぶしに見ていけば、いくらかのことは見えてくるだろうが、そうした作業はやっていけないので、これ以上の話を進めることはできない。

一方、平成の現代に目を移せばどうだろう。技術の前身は明治の頃とは大きく変わったが「電話をかける」という表現が一般的なのは同じである。ただし、その表現が指示するのは、電話機本体の横についてハンドルをぐりぐり回してから交換手呼び出して相手の番号を告げるといった作業でないの言うまでもない。ガラケーかスマホかの違いがあるにしても、携帯端末を用いて相手と繋がるのが平成流である。

ところで繋がるまでの手順に関してだが、昭和の終わり頃までは「ダイヤルする」という言葉も使われていた。これは電話機を操作するという意味であり、電話をかけると同義と考えていい。電話機の番号指定がダイヤル式だったところから生まれた表現なのだが、ダイヤル式がプッシュボタン式に変わり、現在ではタッチパネルに触れることによって番号指定が行われるのが主流である。そのうちAIスピーカーに向かって相手の名前を告げるだけで回線が繋がるのが当たり前になるだろう。こうした変遷に伴って「ダイヤルする」という言葉も消えていった（同じ番号に再びかけ直すことをリダイヤルと呼ぶあたりが辛うじての名残か）。翻って現代の携帯端末の操作に関連するところでは、一般的というよりはまだ若い人たちの間でのスラングの域を出ないが、ボタンをポチッと押す動作をイメージした「ポチる」という言葉が

使われているらしい。もつともこの言葉は擬似的に再現されたパネルのボタンを押すこと全般を意味するのではなく、インターネット通販などで商品の購入を最終的に確定させることを言うものなので、本来の用法から他へ展開され、かつ一部に限定されたものである。

帽子を「かぶる」にせよ、電話を「かける」にせよ、帽子なり電話なりが世間に浸透した後に「かぶる」や「かける」との繋がりが固定化していったに違いない。これらはある意味、言葉に刻まれた風俗史とも言える。仮に、そうだとすれば、この先はどうなるのだろう。身の回りの多くの行為がスマホを介して行われるようになっていくし、これからはA Iスピーカーがその役目を果たすようになるかも知れない。あるいは、もしかするとA Iスピーカーの機能を組み込んだロボットペットのようツールが普及するといった方向に展開することも考えられなくはない。そうすると「晩ご飯はA I B Oにピザ言つといたから」（ロボットペットのA I B Oを使って内蔵の電話機能経由でピザの宅配を注文したという意味）といった言い方で普通に会話が成り立つ日がやってくるのかも知れない。



## 孫ウオツチング(25)

福田 圭

息子の転職の影響で「孫ウオツチング」は、しばらくお休みしていましたが、三か月ぶりの再会です。

三月一日に高槻―神戸間の新名神高速道路が開通し、いつも渋滞する宝塚トンネルのバイパスの道路が出来ました。お陰で大阪と鳥取を行き来する私には渋滞が緩和され便利になりました。

光君（ペンネーム、二歳六か月）と葵君（ペンネーム、八ヶ月）と鹿野（鳥取市に属する）の城跡まで登りました。標高一五〇メートルの小山です。春になり山歩きには気持ちの良い季節となりました。葵君はお父さんにおんぶされて登りました。葵君は初めてのお使

ました。光君にとっては「初めてのお使い」ならぬ「初めての山登り」です。ところどころに階段があるのですが、大人の歩幅に合わせて作られており、光君にとっては崖を攀じ登るようなものです。四つん這いになって登っていきます。「お爺ちゃんを手をつないで登ろう」と言うのに、久しぶりのお爺ちゃんとは手をつなはず、自分で登ります。「どんぐり落ちている」とか言いながら、案外平気なようです。頂上に着くと、標識に「お疲れ様でした。風の音に耳を澄ましてみましょう」と書かれています。見晴らしが良

いです。住んでいるお家も、学校もちっぽけに見えます。そこで展開されている

喧嘩やトラブルも、山頂から距離をおいて眺めると「大したことないんじゃない？」と感じられます。大都会の大阪と鳥取の田舎町を行き来できるのはありがたいことなのかも知れません。

光君は落ちていた枝でお父さんと「電車ごっこ」のように連結して楽しそうに遊んでいました。

さて、お爺ちゃんは「あの階段を下るのは大変だろうな」と思案していました。が、案ずるまでもなく、光君は大好きなお父さんと手をつないで、どんどん下っていきました。疲れ知らずで、元気なものです。

このようにして、田舎暮らしの光君は「初めての山登り」を無事終えることが出来ました。

## 編集後記

今年、陽気が良くて桜も早く咲き花見会を予定されていた関係者は困られたのではないかと思います。今年も芥川だよりの懇親会を開きますのでご都合のつく方はご参加下さい。

ご案内

「芥川だより」の懇親会

日時、五月一三日（日）

午後一時から

場所…芥川商店街、商協会館

会費…二〇〇〇円

テーマ…私が理想とする社会

昨年は、一六名の参加者がありました。投稿して頂いている方や愛読して頂いている方々です。

参加者からは、おもしろい会やまた来年もやってくれ、と皆さん言われます。遠くから来られた方も、知的な刺激がある、と言われます。

参加者は、個性的な方々ばかりで本音で語りますから、面白いのだと思います。なかなか普段には、出会うことがない面々ですから、余計に刺激を受けるのかもしれないね。

## 【広告】

### 電子出版物のご案内

芥川だよりに掲載された「埋め草」を電子書籍化しました。AMAZONのセルフ・パブリッシングを使っていますので、アマゾン・ドット・コムにて書名を指定すれば検索にかかります。

→ <https://www.amazon.co.jp>

書名…埋め草(山紫水明文庫)

著者…大江雉兎

価格…三四一円

形式…KINDLE版

書名…はじめての奥駈(山紫水明文庫)

著者…吾迪散人

価格…五〇四円

形式…KINDLE版

もう一息ガンバろうか…

転ばぬ先の杖と思いいんフルエ  
ンザの予防接種をした。免疫力の  
ある身体でありたいと願いつつ。  
友達と杖をつきながら、目的地に  
ついた。

「まだ歩けるなア」と笑ってすま  
したが、一日おいてから、疲れが  
出てきたら歳をとった証拠だと、  
笑ってきたが、二日目はつらかつ  
た。みだりに笑ってすまされるも  
のでないと反省する羽目になった。

二回接種が原則、一回という説  
もあるそうだが心もとない事態で  
ある。

鳥インフルエンザが発生した。  
多くの鶏が埋設される。画面を見  
て思わずスイッチを切った。農家  
の皆さんの心情を思うと心が痛む。  
ウイルスを運ぶ野鳥は隣の大陸  
から遠慮なく飛んでくる。備えな  
ければならないのは、北のミサイ  
ルだけじゃない。転ばぬ先の杖。  
自分もマスクをつけて鏡の前に  
立ったら、怪人百面相のバアーさ  
んになった。さあ、外出と。

心を豊かに

韓国平昌での冬季五輪も終わつ  
た。北朝鮮をめぐる政治的な思惑  
に振り回されながらも数々の名場  
面が記憶に残る。

スピードスケート女子団体戦、  
追い抜きの一糸乱れぬ「ワンライ  
ン」の美技。ウイニングランの小  
平奈緒とライバルの抱擁。

そして、羽生結弦選手の底力で  
日本中が湧いた。

続いてパラリンピックが開催さ  
れる。国内では、サッカーJリー  
グも始まった。

スポーツに一喜一憂出来る平和  
の尊さをかみしめている昨今。  
存命の喜びと、日々楽しまざらん  
や。

今生きているこの喜びを  
日々楽しもう



俳句

土田 裕

鎌倉や春告鳥の声たしか  
春の土  
たつぷりつけて地場野菜

外つ国の

言葉飛び交ふ花見かな

花爛漫

山は在り処を語りけり

雑草が

ふんだんに出て花菜畑

影山武司

立春の

日差つえばむ雀かな

北窓を開きて届く水の音

歩き初めし

稚の声聞く寒の朝

落ちてまた

空に吸はれし春の雪

梅東風や

朝餉の卓のツアー―広告

枝垂梅の

細き枝影揺らす風

【広告】  
書籍の制作承ります

お手元の原稿を書籍の形に仕上げる  
サービスです。データを読みやすい形  
に整えたうえで、書籍の形にします。  
ページ数や制作部数が少ない場合でも  
対応します。

(例) 30ページほどの文章をまとめた  
小冊子を10冊ぐらい作りたいのだが、  
印刷屋に発注すると高額になるので悩  
んでいる……

\*文字入力や図表の作成などが必要  
になる場合は、別途ご相談ください。

制作部数 (冊)

	~10	~20	~100	100~
~32	40,000	70,000	90,000	
~60	60,000	100,000	120,000	
~100	80,000	130,000	160,000	
100~	* 個別にご相談ください			

料金の目安(円)／詳細は仕様によって異なります

お問い合わせ

OFFICE 34 (吉田 尚)

(075) 711・4688